

# 小林市におけるキャリア教育

Career Training in Kobayashi City

佐藤 実芳

Miyoshi SATO

## はじめに

筆者は、平成 27 年 9 月、現在日本において唯一現存する准看護師養成所と技能連携した高等学校の定時制衛生看護科を研究するために、宮崎県小林市を訪問した。その際、街で出会った小・中学生の姿勢の良さと、見ず知らずの筆者に対する気持ちの良い挨拶に感動し、同市の教育に興味を持った。

早速教育委員会にお尋ねしたところ、「立腰」<sup>(1)</sup>を学校教育に取り入れていることや、市独自の「こすもす科」<sup>(2)</sup>を中心に質の高い小中一貫教育を実施していることを知り、筆者は同市の教育に着目するようになった。

現在同市は、市民一人一人の自己実現をめざした「0 歳から 100 歳までの小林教育プラン」のもと、「学びたい」、「学ばせたい」気持ちを高める教育の取り組みを行っている。そして就学前の子どもから高齢者までの生涯学習により、「自立」・「感謝」・「貢献」という循環・発展型社会作りに取り組んでいる。同市は、「これからの小林市民に必要とされる資質や能力を身に付け、自分自身や郷土に対して自信と誇りをもって生きていく人間を育成することを目指し」<sup>(3)</sup>、「知」・「徳」・「体」・「食」のバランスのとれた子どもを育成するために、「こすもす科」の学習を市内全小・中学校において 9 年間実施して、学校間の格差なく平等で質の高い教育を保障している。

ところで人工知能時代が近い将来到来する今日、教育の分野ではキャリア教育が極めて重要な位置づけになってきている。平成 20 年 7 月に閣議決定された「教育振興基本計画」でも、キャリア教育の推進が強く求められた。同市は「こすもす科」においても、小中一貫のキャリア教育を実践してきた。更に平成 29 年度から小林教育研究センター<sup>(3)</sup>が、『『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育の実現 ～自ら課題に気付き、協働で解決する力を求める教育の推進～』をテーマに、キャリア教育の実践的な研究を始めた。

同市は鹿児島県との県境にあり、霧島連山の豊かな自然に囲まれている。そのような環境での霧島の森が生み出す天然の軟硬水、及びその水で育った農作物や宮崎牛などが名産である。しかし、大都会とは異なり地域的に子ども達は様々な職業があることを知る機会が少ない。本稿は、「小林市の未来を担う人材を、小林市の力で育てるキャリア教育」を分析し、その意義を明らかにすることを目的とする。

## 1. 小林市の将来像～みんなでてなむ 笑顔あふれる じょじょんよかところ 小林市～

「みんなでてなむ 笑顔あふれる じょじょんよかところ 小林市」の意味は、「みんなと一緒に笑顔あふれるとても素晴らしい小林市にしましょう」である。同市の方言である西諸弁が使われた移住促進 PR ムービー「ンダモシタン小林」が、平成 27 年 9 月 17 日にフジテレビ放送の「めざましテレビ」<sup>(4)</sup> で紹介され、方言が小林市の地域活性化の起爆剤として活用されている。小林市が目指す将来都市像のパフレットには、以下のように説明されている。

この将来都市像は、「てなむ」＝「協働」して、市民が主役の、市民や本市を応援いただく全ての人々と共にまちづくりを推進し、人々が健康であり笑顔で、「じょじょんよかところ」＝「地域・自然・文化・歴史等がきらきら輝くとても素晴らしいまち」を、オール小林で実用させよう、ということを表現している。<sup>(5)</sup>

平成 27 年 10 月に、同市は人口の現状分析に基づき、市が取り組むべき施策の方向を提示した『てなんど小林 総合戦略（まち・ひと・しごとの創生）』を発表した。「人口ビジョン」としては、合計特殊出生率は 1.84 で全国平均より高いが、16 歳から 39 歳の年齢層が市外へ流出し、それが人口減少の原因となっている。市外へ流出する理由は、希望する仕事と同市にはないことである。そこで、「若い世代が希望する仕事を創る」ことを「総合戦略」とし、「若い世代の雇用（『仕事』）の創出から『ひと』を呼び込み、『まち』の活性化を図り、まち・ひと・しごとの創生の好循環を進め」<sup>(6)</sup> ることを、基本方針としてあげた。そして具体的な施策として、以下を基本目標とした。

1. 小林市に安定した雇用を創る
2. 小林に新しい人の流れを創る
3. 小林に住む若い世代の希望をかなえる
4. 時代に合ったまちをつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する

この基本目標の 3 の具体的な施策の中に、「0 歳から 100 歳までの小林教育の推進」が含まれている。そして「魅力ある教育環境を整備することによって、定住の促進を図る」ために挙げられている 8 項目の中に、キャリア教育推進事業がある。重要業績評価指数は、「学びたい度」と「学ばせたい度」の向上で示される。

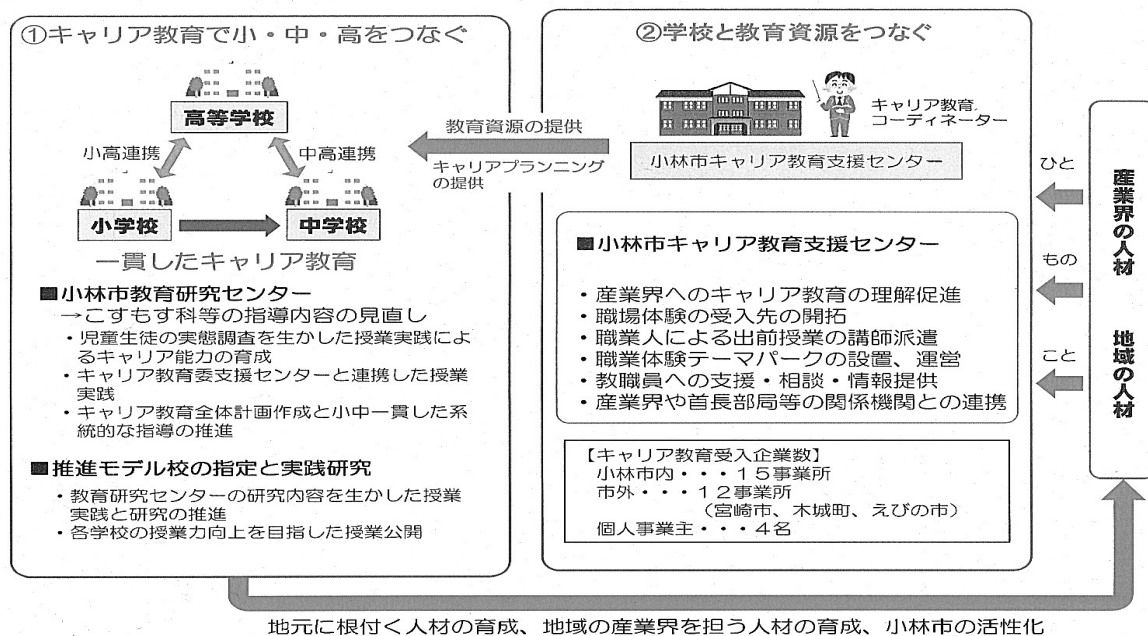
## 2. 小林の未来を担うキャリア教育推進事業

小林市のキャリア教育の考え方の特徴は、小林市で活躍する人材育成のみならず、小林市を離れても小林市に貢献することができる人材育成を目指していることである。同市のキャリア教育は、市の未来を賭けた挑戦ともいえる。

同市のキャリア教育推進事業（図 1 参照）は、学校と教育資源（地元産業界と地域の人材）をつなぐ小林市キャリア教育支援センターが、学校に教育資源とキャリアプランニングを提供し、小学校・中学校・高等学校における一貫したキャリア教育で、社会的・職業的自立に向け

ての基盤となる能力・態度を子ども達に身に付けさせ、地元根付く人材と地域の産業界を担う人材を育成し、小林市の活性化を図るというものである。

### 小林の未来を担うキャリア教育推進事業



小林市教育委員会提供

図1：小林市の未来を担うキャリア教育事業

### 3. 小林市キャリア教育支援センター

同市は、平成29年5月25日、市内の小学校・中学校・高等学校と地元企業の連携を促進することを目的に、小林商工会議所に「小林市キャリア教育支援センター」を設置して運營業務を委託した。センターには、富士通でソフトの開発の他、開発部門と経営部門の調整などに携わった経験のある藤田英二が、キャリア教育コーディネーターとして就任した。コーディネーターは、事業に賛同する企業を発掘して、学校と企業の橋渡し役を担う。「広報こばやし 3月号」には、協力企業が市内外に38社あり、平成29年度には市内11校でキャリア教育を実施したことが報告されている<sup>(7)</sup>。

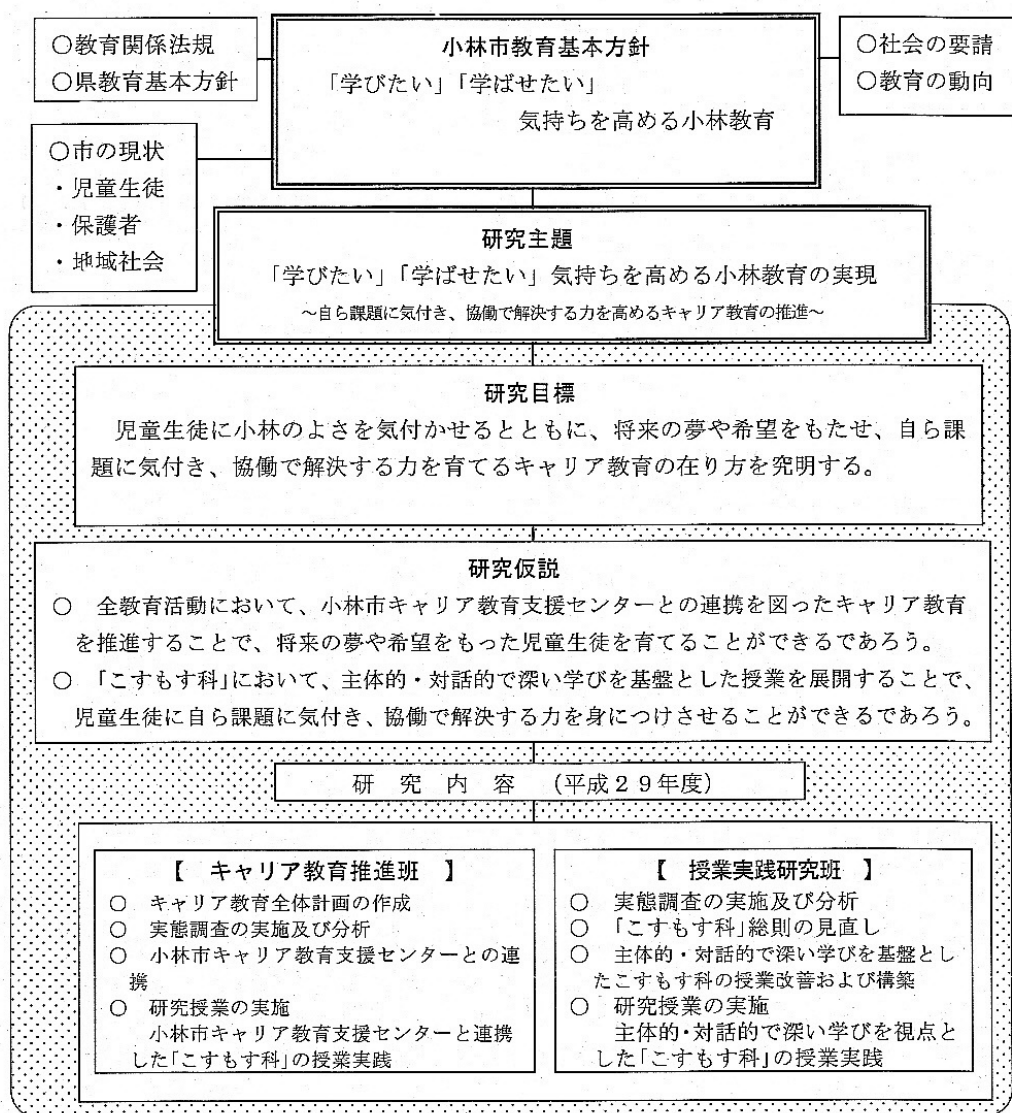
例えば平成30年1月25日には、細野中学校の1・2年を対象に、宮崎市のトヨタカローラ宮崎が、進路選択を考えるキャリア教育を実施した。前半の1時間で、佐土嶋徹常務が、自動車顧客に届くまでの流れを紹介し、自動車の開発から部品の製造、販売店まで運送するトラック業者など様々な業種の人々が関わっていることを説明した。後半の1時間で、自動ブレーキを装備した普通自動車を使って車が人や障害物などを検知して停止する技術を体験したり、電源コンセント付きのプラグインハイブリッド車（PHV）でホットドックの調理をしたり、人工知能を搭載した人間型ロボットと会話をしたりして、生徒達は最先端の技術を学んだ。

授業以外でも、同年2月10日に小林中央公民館で「小林近未来ハイスクール」を開催し、

中学生・高校生と社会人（会社員、自営業者、行政関係者）が、将来の職業や暮らしについて語り合い、希望する職業や理想とする生活などを発表した。

#### 4. 小林市教育研究センターのキャリア教育に関する研究

平成 29 年 3 月に策定された第 2 次小林市総合計画では、協働のまちづくりの推進等を基本理念としている。同市教育委員会では、この総合計画の個別計画である「小林市教育基本方針」を一部改訂する際、キャリア教育の充実を施策の 1 つとして位置づけ、小中一貫教育並びに学校と家庭、地域社会、産業界の連携及び協働によるキャリア教育を展開し、児童生徒に社会的・職業的自立の基盤となる能力や態度を育成している。小林市教育研究センターのキャリア教育に関する研究構想を以下に示しておく。



出典：小林市教育センター「『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育の実現 ～自ら課題に気づき、協働で解決する力を高めるキャリア教育の推進」、平成 30 年、2 頁。

図 2：小林市教育研究センターの研究構想

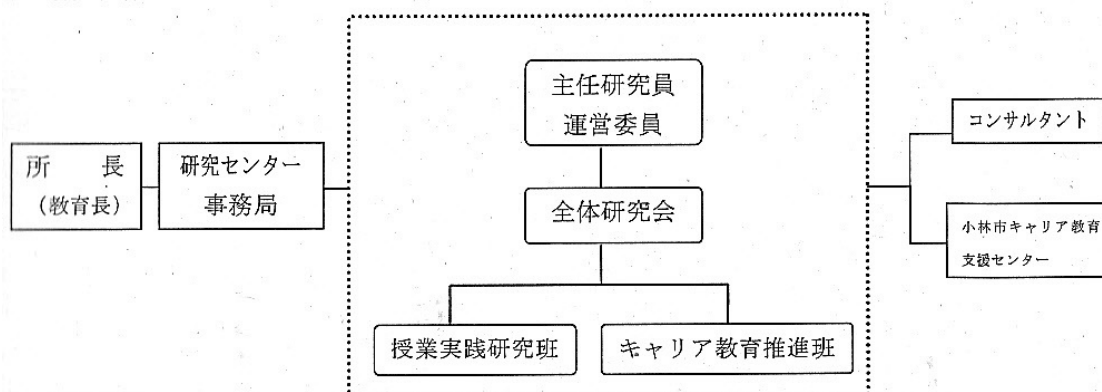
本研究は3年計画で、各年度の計画が以下のように定められた。

表1：平成29年度～平成31年度の研究計画

平成29年度	平成30年度	平成31年度
<ul style="list-style-type: none"> <li>○キャリア教育に関する実態調査の実施及び分析</li> <li>○市キャリア教育全体計画の作成</li> <li>○小林市キャリア教育支援センターとの連携</li> <li>○「こすもす科」総則の見直し</li> <li>○主体的・対話的で深い学びを基盤とした「こすもす科」の授業改善および授業構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各学校におけるキャリア教育全体計画の作成</li> <li>○「こすもす科」の授業改善と授業構築及び学級活動との関連性の整理</li> <li>○小林市キャリア教育支援センターとの連携</li> <li>○キャリア教育に関わる「こすもす科」テキスト改訂に向けた方向性の検討及び準備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「こすもす科」と連動した学級活動の授業構築</li> <li>○キャリア教育に関わる「こすもす科」テキストの改訂作業（作業部会別途発足）</li> <li>○地域の人材や産業と連携した小林の未来を考えるキャリア教育手引きの作成</li> </ul>

出典：小林市教育研究センター、前掲資料、3頁。

研究組織は、以下の通りである。



出典：小林市教育研究センター、前掲資料、3頁。

図3：研究組織

センターでは、キャリア教育推進班と授業実践研究班とに分かれて、研究が行われている。平成29年度は各々以下のような取組を行った。

<キャリア教育推進班>

「こすもす科」を基盤とした小中一貫の9年間を見据えた系統的なキャリア教育を実現するため、「こすもす科」及び同科の単元と関連の深い道徳、特別活動について整理し、今後の「こすもす科」の改定に活かすとともに、「こすもす科」と特別活動とのキャリア教育に係る相互補完的な授業の在り方について研究を進めることにした。

また、同市のキャリア教育の弱点を発見するために、小中学校でキャリア教育に関する意識調査を実施した。その結果、児童生徒はキャリアプランニング能力を十分には身に付けておらず、教職員も指導していないという事実が明らかになった。そこで小林キャリア教育支援センターと連携した指導を行うことにより、児童生徒が自ら将来設計する意識を高めさせることができると考え、小学校6年生の「こすもす科」で、研究授業を実施した。

研究授業では、児童のアンケートから、児童の将来希望する職業のゲストティーチャー（5 企業）を招いたこともあり、主体的・対話的で深い学びを実現させることができた。その一方、授業の準備段階での企業との打合せ等が大きな負担になったため、小林市キャリア教育支援センターや KSSVC(こばやしスクールサポートボランティアセンター)を活用する必要があることが明らかになった。

< 授業実践研究班 >

小中学校の教職員を対象に、「こすもす科」で身に付けさせる能力が、児童・生徒に身に付いているかどうかのアンケート調査を実施した。その結果が以下の表である。

表 2：各々の能力が児童・生徒に「身に付いている」と感じている割合

(数値は%)

	小学6年				中学1年				中学2年				中学3年			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
自己育成能力	0	62	38	0	4	77	19	0	10	65	20	5	5	75	20	0
責任遂行能力	0	77	23	0	12	76	12	0	10	70	15	5	5	65	30	0
コミュニケーション能力	0	69	31	0	0	38	58	4	5	55	35	5	0	45	55	0
集団参画能力	0	31	69	0	4	35	53	8	5	35	55	5	0	45	55	0
地域貢献能力	0	38	62	0	8	31	46	15	0	45	50	5	5	45	50	0
将来設計能力	0	46	54	0	12	42	46	0	5	50	40	5	10	55	35	0

4 = 身に付いている。                      3 = どちらかと言えば身に付いている。  
 2 = どちらと言えば身に付いていない。      1 = 身に付いていない。

出典：小林市教育研究センター、前掲資料、7 頁。

キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力とより関連のある能力（自己育成能力・責任遂行能力・コミュニケーション能力・将来設計能力）について、「こすもす科」の授業で「コミュニケーション能力」と「将来設計能力」を高めるために「主体的で・対話的で深い学びを視点とした授業を実践するとともに、これから社会において必要な資質・能力を身に付けさせることが急務である」と分析した。そして、「こすもす科」の総則をキャリア教育の視点を取り入れて見直し（図 4 参照）、「こすもす科」における 3 領域及び 8 能力とキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力との関連を明確にし（図 5 参照）、学習過程を改善し（表 3 参照）、単元計画及び指導過程を見直した（表 4 参照）。そして、中学校 1 年生で、『こすもす科』の授業において、主体的・対話的で深い学びを通して、これからの社会で求められる力について考えさせることによって、自らの将来設計の課題に気づき、協働で解決する力が育つであろう」という仮説に基づく研究授業を実施した。

今年度の研究の成果と課題は以下の通りである。

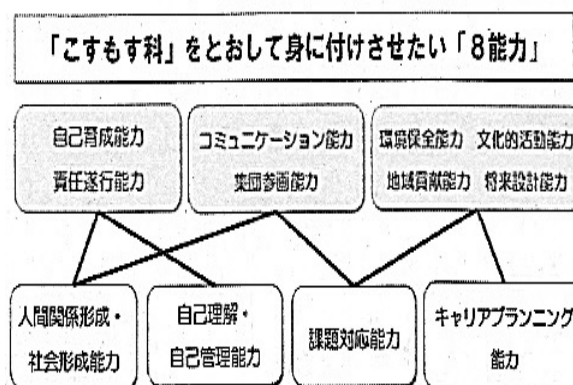
< 成果 >

- キャリア教育の全体計画や「こすもす科」と道徳や学級活動との関連を示した系統表を作成することで、各教科における授業内容の関連や、指導の系統性が明確になり、今後のキャ



出典：小林市教育研究センター、前掲資料、8頁。

図4：キャリア教育の視点を取り入れた「こすもす科」構想



出典：小林市教育研究センター、前掲資料、8頁。

図5：「こすもす科」の能力とキャリア教育の能力の関係




リア教育推進の方向性が確認できた。

- 実態調査の分析や、「こすもす科」総則の見直しにより、「こすもす科」において、生徒一人ひとりが、主体的・対話的に授業に取り組み、自ら課題に気づき協働で解決する力を高める指導過程の在り方について検証することができた。
- 地域の人材活用に加え、小林市キャリア支援センターと連携を図ることで、地域内外の様々な職種や企業とのつながりが可能となり、授業での活用が広がった。

<課題>

- 「こすもす科」で身に付けさせたい8能力とキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力の関係性の整理の必要性があり、合わせて、キャリア教育の全体計画をどのように活用していくか、今後さらなる研究が必要である。
- 本年度の研究の成果を生かし、「主体的・対話的で深い学び」を基盤とした授業を構築す

表 3：社会領域の学習過程新旧比較

	現行	新
<p>ホップ 単元全体の課題に 気づく</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 単元全体にかかわる学習課題の設定</li> <li>● 様々な職業、上級学校の理解を深める学習内容の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 単元全体にかかわる学習課題の設定</li> <li>● 様々な職業、上級学校の理解を深める学習の<u>計画</u>の設定</li> </ul>
<p>ステップ 話し合いや 体験活動を行う</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 課題解決に向けた取組</li> <li>● 将来の夢を考えるための外部人材、施設の活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 問題解決に向けた取組</li> <li>● 様々な職業、上級学校、<u>自分の適性についての理解を深める学習</u></li> <li>● 将来の夢を考えるための外部人材、施設の活用</li> </ul>
<p>ジャンプ 課題解決を行う</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 進路計画の作成、発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 進路計画の作成、発表</li> </ul>
<p>ランディング 取組を評価し、より良いもの考える</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分が今後頑張ることや生き方の整理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分が今後頑張ることや生き方の整理</li> </ul>

出典：小林市教育研究センター、前掲資料、8頁。

表 4：学習指導過程の基本

導入	めあてをつかませる。
展開前段	個人で考えさせる。
展開後段	他者と交流させる。
終末	個人で振りかえらせる。

出典：小林市教育センター、前掲資料、8頁。

るため、「こすもす科」の他の学年や単元における検証を重ね、学級活動や各教科に広げていく必要がある。

- これまで活用していた、こばやしスクールサポートボランティアセンター（KSSVC）と小林市キャリア教育支援センターとの棲み分けをしつつ、地域自在活用の効果的な活用の在り方について、さらなる検証が必要である。



## 5. TENAMU 交流スペース

平成 29 年 12 月、まちなか複合施設「TENAMU ビル」が完成した。同ビルの 1 階はスーパーマーケット、2 階は交流スペース、3 階から 5 階は賃貸マンションで、中心市街地活性化の拠点として期待されている。小林市が設置した 2 階の交流スペースは、乳幼児から高齢者まであらゆる世代の交流拠点となる場所で、「木育スペース」「まちライブラリー」「フードラボ」の 3 エリアに分かれている。

「木育スペース」は、親子（乳幼児）で遊ぶことができる子育て支援スペースで、子どもの五感に働きかける木の玩具と木の香りで、親子がリラックスできる空間になっている。「まちライブラリー」では、市民から寄贈された 3000 冊の本を自由に閲覧でき、1 人 1 回 2 冊まで借りることができる。本にはメッセージカードが挟まれ、本を通じた交流ができるようになっている。市立図書館とは違い、飲食が可能である。絵本コーナーは、靴を脱いで過ごすことができる空間なので、乳幼児でも安心して楽しめる。「フードラボ」は、調理器具が完備されたキッチンで、料理教室や六次産業化による商品開発などで活用できる。

筆者は、平成 30 年 3 月 11・12 日に、TENAMU 交流スペースを訪問した。11 日は日曜日であったこともあり、「木育スペース」は多くの親子連れで賑やかで、子どもの声と木の香りで筆者も心が癒された。「まちライブラリー」では、韓国語講座（13 時 30 分～15 時）とスピリチュアル占い（13 時～16 時）が無料で開催されている空間、学生が一人で勉強している空間、小・中学生等が友達と本を読みながら談話している空間、親子 3 代でテーブルを囲んでいる空間、楽器を弾くことができる空間、中学生～若者が集まって学習会をしている空間等が自然に混在していた。

「まちライブラリー」の一角には、誰でもリクエストを書き込むことができるスペースが設けられている。イベントは、利用者からの「こんなイベントをしてみたい」という提案に対して、希望者が多い場合に開催される。3 年前に始まった市民大学も、平成 30 年度から学部制（第 1 金曜日：教養学部、第 2 金曜日：農学部、第 3 金曜日：商業・経済学部、第 4 金曜日：芸術学部）を取り入れて「金曜日は大学生」として入学を募集していた。市民大学には、小林市在住、在勤、在学の高校生以上が入学できる。また、TOEIC、TOEFL、大学受験、英検などの「受験英語対策」を、無料でスタッフがしてくれる。まさしく、「学びたい」「学ばせたい」小林教育を実現している場だと感じた。

小林市の教育委員会が教育方針の一つに「食育の推進と充実」を掲げていることから、「まちライブラリー」には食育の展示コーナーがある。訪問した時は、栗須小学校と西小林中学校の食育活動が展示されていた。また、別のコーナーには小林市ガイドボランティアと宮崎県立小林高等学校美術部が製作して教育委員会に寄贈した「こばやし文化財かるた」が展示されており、同市の歴史や文化を知ることができた。

「フードラボ」の前には、小林秀峰高等学校の農業科と機械科の農工連携による研究課題の一環として開発された「も～ビスケット」についての展示があり、「フードラボ」では土日 6 食限定でバレンタインプレート（同校で栽培されたトマトとイチゴを使用）が提供されていた。

また、地元産の食材を用いた軽食（バブルワッフルとフレンチトースト）と飲み物が提供されていた。まちライブラリーでは、学生（小林市在住、在学の中高校生・大学生・専門学生）アシスタントがイベントの企画運営に参加したり、勉強会を開催したり、将来のことを話し合うなど、学校の枠を超えた繋がりを実現する場となっている。

## 終わりに

小林市は、「こすもす科」を創設して小学校と中学校の 9 年間一貫教育の実施から着手し、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校との連携を実現し、0 歳から 100 歳までの小林教育を旗印に、新しい教育の試みに次々取り組んでいる。『てなんど小林 総合戦略』には、「他に誇れる教育分野を強化するなど、オンリーワンとしての特徴あるまちづくりを進め」<sup>(8)</sup> ると、独創的で先進的な教育を同市のセールスポイントとするほど、同市は教育に熱心に取り組んでいる。

人工知能社会の到来を目前に控えた今日、子ども達は幅広い視野を持って職業選択をする必要がある。今、求められているキャリア教育とは、人工知能社会を力強く生き抜く子どもを育てることである。

農業、畜産そして林業（木工）が主たる産業である小林市にとって、小林市に残りたい（小林市で生活したい）という子どもを育てることは勿論大切なことである。しかし、将来的に市の存続を考えた場合、小林市を残したい（小林市以外の土地で活躍することで小林市を支えたい）という子どもを育てることも必要である。同市の教育は、学ぶ意欲があり、基礎的・汎用的能力を備えた小林市の未来を支えるたくましい人材の育成を目指している。

同市は、今まで実現することが不可能であった、小学校と中学校と高等学校の 12 年間一貫のキャリア教育を、キャリア教育支援センターを介して実現させた。同市は、学校の枠を超え、様々な世代や職業の人との交流により子ども達のコミュニケーション能力を高めると共に、将来に向けて必要な能力をどのように獲得していくかというキャリアプランニング能力を育てている。

同市の子ども達が、そして同市自体が、人工知能社会の時代に向けてどのように成長していくのか、筆者はその未来に注目していきたいと考えている。

## 【注】

(1) 「立腰」とは、「背骨を立てる」という意味で、森信三が「心身相即」の精神を提唱したことに由来する。小林市では、「平成 23 年度小林市教育基本方針並びに教育施策」の中でも、基本的な学習習慣の育成と内面的な指導の充実のために立腰指導を推進している。筆者は、平成 28 年 3 月 16 日に小林小学校を訪問し、授業は立腰と黙想で始まり、児童の姿勢の良さと授業に集中している様子を見学してきた。

(2) こすもす科は、平成 21 年度（平成 22 年 3 月 23 日に小林市が野尻町と合併したため、野尻町区は平成 23 年度）に創設された。同科の内容は、小林市民に必要な資質や能力を身に

付けさせ、自分自身や郷土に自信と誇りをもって生きていく人間の育成を目指している。平成 23 年度に、単元の整理統合と新単元を導入して、『児童生徒用テキスト』及び『指導者用手引き』の改訂作業が行われた。

- (3) 小林市教育委員会『こすもす科指導者用手引き I 【改訂版】小学校第 1・2 学年用』、平成 24 年 4 月、はじめに。
- (4) 「聞けば聞くほどフランス語!?最強方言自慢～宮崎県・西諸弁編～」でフランスから来た男性が日本語字幕付きで小林市について語り、最後に「私がここまで西諸弁でしゃべっていたことに」という字幕が流れるものである。フランス語に聞こえたナレーションが、すべて西諸弁だったということで、話題を集めた。
- (5) 小林市「小林市が目指す将来都市像」。
- (6) 小林市『てなんど小林 総合戦略（まち・ひと・しごとの創生）』、平成 27 年 10 月、25 頁。
- (7) 小林市総合政策部地方創生課編「広報こばやし 3 月号」、平成 30 年 3 月、7 頁。
- (8) 小林市、前掲書、平成 27 年 10 月、28 頁。

#### 【参考文献・資料】

1. 株式会社アドルト『はたらく家具』、平成 29 年 11 月。
2. 小林市『てなんど小林 総合戦略（まち・ひと・しごとの創生）』、平成 27 年 10 月。
3. 小林市「回覧 金曜日は大学生 ワクワクいっぱい おもしろいから行ってくる！」
4. 小林市教育委員会「TENAMU 交流スペース ご利用案内」。
5. 小林市教育センター「『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育の実現 ～自ら課題に気付き、協働で解決する力を高めるキャリア教育の推進」、平成 30 年。
6. 小林市総合政策部地方創生課編「広報こばやし 1 月号」、平成 30 年 1 月。
7. 小林市総合政策部地方創生課編「広報こばやし 3 月号」、平成 30 年 3 月。
8. まちライブラリー「学生アシスタントミーティング」。
9. 「小林 企業と学校 懸け橋に キャリア教育支援所設置」『宮崎日日新聞』、平成 29 年 5 月 26 日朝刊スーパーワイド：きりしま、第 20 面。
10. 「小林『文化財かるた』を寄贈 高校生やガイド手作り『郷土の貴重な史跡など継承して』」『毎日新聞』、平成 29 年 10 月 25 日朝刊地域：宮崎、第 25 面。
11. 「車や IT、最先端学ぶ 細野中生が技術体験」『宮崎日日新聞』、平成 30 年 1 月 26 日朝刊スーパーワイド：きりしま、第 24 面。
12. 「小林 理想の職業、生活語る 中、高生がワークショップ」『宮崎日日新聞』、平成 30 年 2 月 16 日朝刊スーパーワイド：きりしま、第 22 面。